様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　４ 月 ２６ 日現在

機関番号：１３９０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００６１０

研究課題名（和文）言語の複層性に基づく日本語条件表現史の分析

研究課題名（英文）A Historical Study of Conditional Expressions in Japanese: From the Perspective of Material Characteristics

研究代表者
矢島　正浩（Yajima, Masahiro）

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：００２３０２０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：条件表現の通史的な記述を目指し、まず落語資料（SP盤レコードの音声落語・速記本『上方はなし』）の集中的な研究を行った。さらに言語の層に留意して規範意識「高」の層における明治期の言文一致体・雅俗折衷体など文体生成に際してたどる過程を検討し、また同じ書き言葉的資料でも表現者の「個」が顕在化する資料で言語変化を推進する要素が観察できることなどを明らかにした。さらに規範意識「低」の層で現れやすい地域的な特性等について記述的研究を行った。
これらの成果を踏まえ、順接と逆接の両条件表現で一体性・連動性が顕著な部分とそうでない部分があることに留意しながら、条件表現の全体史の記述を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
資料的な価値が十分に見定められていない落語資料を対象にコーパスを作成し、複数の研究者とそれを共有しながら研究論文集の形で世に問うことができた。また、従来、言語研究の対象とされづらかった書き言葉的な資料（『上方はなし』、近代語諸資料等）を対象とした研究を進め、言語研究の意義を論じることができたことも、今後の日本語史研究の幅を広げることにつながったものと考える。また順接・逆接を超えた条件史の把握は、文法史の各事項（時制史・構文史・モダリティ史など）との連動性の中で説明が可能だったものである。その帰着するところは日本語全史の把握であり、その波及範囲は広範に及ぶものであったことが推察される。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this article is to illuminate the history of conditional expressions in the Japanese language. First, the article discusses the following four aspects: 1) rakugo materials have peculiar linguistic characteristics; 2) authors in the Meiji period generated language styles to unify written and spoken Japanese based on their individual normative consciousness; 3) among materials with the nature of written language, those with tangible speaker “individuality” show a particular tendency to promote changes in the language; and 4) materials with the nature of spoken language tend to show regional characteristics of the language.
Next, the article illuminates the history of conditional expressions, both copulative and adversative, based on the discussions 1) through 4).

研究分野：日本語学

キーワード：条件表現史　日本語史　順接／逆接　仮定／確定　規範意識　音読／黙読　言文一致

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

近年の日本語の条件表現史研究については、ややその分析が細分化する方向で進展する一方で、統合的な把握が必ずしも十分ではない現状がある。この状況は、各研究が対象とするレベルが多岐にわたるため、それら相互を関連付けた把握が困難になってきていることによるところが大きい。例えば、以下の 3 点の指摘を、統一的に条件表現史として位置づけるのははなはだ難しい。

(a). 名詞「以上」を順接確定（原因理由）の接続辞的に用いる用法は、話し言葉よりも近代の書き言葉の系譜（文語体雑誌、翻訳、新聞社説）で発生、発達する。

(b). 逆接の確定辞ドモが近世後期にケレドモに順次交替し、衰退期を迎えるが、順接レバのカラへの交替期（近世前期）に比べると（なぜか）遅い。

(c). 接続辞には接続詞的用法（例「そんなら～」）、終助詞的用法（例「～けど。」）があり、両形式は段階的に発達するが、その方法、形式、頻度などが上方・大阪と江戸・東京とで大きく異なる。

それぞれの問いの対象とする言語レベルや論点が様々であるため相互の関係が問いづらく、個々の知見が並列したままであることにより、どのような変化が、なぜ起きたのかといった大局的な問いかけに対する見通しを得にくい状況が生じている。

この現状に対して、細分化された知見は、「言語の層に注目する」ことをもって整理することが一つの手がかりになるのではないかという見通しがある。すなわち、(a)は改まった場で特に起こるものであり、(c)は対照的に規範意識とは無縁な日常的話し言葉でこそ起こりやすく、なおかつ地域差も濃厚に現れる層である。(b)は、日本語の少なくとも中央語においては広く行きわたった特徴と言える。このように、それぞれが異なった言語層で起きている事象であると見ることによって、それぞれが根底で共有する原理、あるいは見えにくかった関係性・位置づけなどが明確になるのではないかと考える。

その整理を行うことによって、はじめて条件表現の歴史を正確に把握することができる部分があるであろう。そもそも、順接と逆接の両領域を総合的に捉えた条件表現の歴史的把握はこれまで十分になされてきているとは言えない。上記の見通しに基づきつつ、最終的には順接逆接を合わせた総合的な歴史記述を目指した研究を行う必要がある。

２．研究の目的

本研究は上記の問題意識に基づき、以下の観点を目標の軸として定めた。

（1）条件表現の通史的把握に必要な資料整備・資料研究を行う。

（2）規範意識が「高「低」の言語層に注目して、それぞれに起こる変化について明らかにし、日本語の複層性に基づいた条件表現史の把握を行う。

（3）（1）（2）に留意しつつ、順接と逆接の両条件史の相互関係を明らかにしながら総合的な把握を行う。

（1）は、通史的な条件表現の記述を行うにあたって、十分な観察が行き届いていない時代や領域、言語資料を対象として、資料整備を行い、知見を集積することを目的とする。具体的に、まず SP 盤落語レコードを文字化したデータを国立国語研究所に提供し、同研究所で進めるコーパス化事業の一部に位置づける。また、同資料のデータを用いた共同研究を行う。さらに落語速記本からは『上方はなし』を対象として取り上げ、書記言語の要素を持った資料における条件表現の記述を目指す。（1）の研究は、日本語史研究の幅を広げることへの貢献を目指すとともに、近代日本語の文法史を多角的に把握し、日本語全体史の中に条件表現を位置付ける方法によって、同表現史の体系的な把握に寄与することをねらいとするものである。

（2）においては、条件表現について、これまでさまざま明らかにされてきた事象について、言語史が複数の層のそれぞれにおいて実現しているという視点から整理する。緻密に分析された研究成果の一つ一つを並べるだけでは、適切な歴史把握に結びつかない。ここで行う整理によって、一見、関連が問いづらい現象の、根幹部分での関連性を明らかにし、また、その結び付けによって気づく条件表現史上の記述の欠落部分も明確にする。欠落を埋める作業・研究、総合的な把握の試みを繰り返し行うことによって、条件表現史の記述をより細密なものにする。

本研究で最終的に目指すのが、（3）の順接と逆接の両条件表現の総合的な把握である。これまでの研究は、基本的に順接条件、逆接条件のそれぞれ別個に問われてきたと言ってよい。諸先学の中には、両領域の関連性について言及するところもないではないが、共通点に関する概括的な把握が中心であり、相違点に目を凝らした細部の分析・研究については、ほとんど手つかずの段階にある。また、変化を推し進めた原理についても、中世期までの議論がほとんどであり、近世以降を視野に入れた研究は質・量ともに限られているのが現状である。また、数多の細部にわたる近年の研究成果についても、言語の複層性に留意することによって、条件表現史の総合的把握に利用していく余地が大いにある。以上の現状把握に基づき、（1）（2）で得た知見を踏まえながら、順接・逆接の両条件表現の両関係にわたる歴史を総体的に把握し、通史的な記述に貢献することを目指すものである。

３．研究の方法

上記のそれぞれの目的に対して、次の方法を設定した（以下括弧付きナンバーは、２節と対応）。

（1-①）SP レコード落語を文字化し、音声データとともに国立国語研究所のコーパス化事業に提供する。また、そのデータを用いた言語研究を複数の研究者とともに共同で行い、本研究課題の代表者が編者となって、その成果を論文集として刊行する。

（1-②）速記本『上方はなし』については、日常談話・音声落語との比較を通じて、同資料に実現する複数の言語層のありようを分析する。

（2-①）規範意識「高」の言語層については近代・言文一致と関わる作家、資料を対象としてその言語形成の実情を把握する。

（2-②）規範意識「低」の言語層については東西差が起こる事象を取り上げ、それぞれの歴史を詳述し、東西差を生じさせる背景について考察する。

（3-①）文法史、さらには日本語史としての総合的把握を、言語の複層性という観点を視野に入れつつ行う。

（3-②）順接・逆接の両条件史の関係性に注目することで際立つ点（両領域の相違・逆接に顕著な事象など）を重点的に観察・記述する。また日本語歴史コーパス内でも特に言語層の錯綜が際立つ近代を対象として、逆接仮定史の把握の仕方を提案する。

４．研究成果

（1）資料研究、資料性に関する検討

①．本研究課題の研究代表者も作成に関わった SP レコード落語の音声ならびに文字化データを国立国語研究所に提供した。そのデータは改めて国立国語研究所で整えられ、『日本語歴史コーパス』のサブコーパス「明治・大正編VI落語 SP 盤」短単位データ Ver.0.9 として、2022 年 3 月 31 日をもって公開された。並行して、同文字化データを 14 名の研究者に送付し共有、さらに各問題意識に従って音声落語を用いた研究事例を持ち寄り、次の論文集として公刊した。

○金澤裕之・矢島正浩共編『SP盤レコードがひらく近代日本語研究』笠間書院，2019年8月，ISBN 978-4-305-70879-3

その共同研究によって明らかになったことのうち、大きな点は、a.落語に描かれる言語運用には、規範意識の発動の強弱を軸に、複数の層が重なり合っている様子が見えること。b.その象徴的な側面として、地には汎地域性（スタンダード言語相）が、会話には東西差（地域密着言語相）がうかがえること。c.文法史の面で見ると、近世から連綿と連なる近代日本語の一局面が観察できること。そして、概して東京＞大阪という遅速で捕捉される言語使用の状況が見て取れることの 3 点である。

②．近代のコーパス化された諸資料を対象として、それぞれの資料の成立事情から説明される言語運用の状況について観察、整理を行った。ジャンル別の相違はもとより、各テキストごとにその資料らしさを構成する文法が異なり、それぞれの要請に応じた運用が行われている。またそういった各資料の成立事情に応じた言語状況を把握することによって、通史的日本語史研究における利用のあり方や、資料の特性を押さえた、帰納的な文法機能分析の可能性が広がる。

また、以上の研究を通じて得られるデータと過去に研究代表者が行った研究との知見を合わせると、同じ書き言葉性を有する資料でも、表現者の「個」が顕在化する資料（演説・論文…）は話し言葉に現れにくい語形を用い、日本語史を牽引する力を有するのに対し、表現者の「個」の後景化が求められる資料（教科書・雑誌・新聞…）は特定の語形を集中的に用いる傾向が強く、日本語史への影響を持ちにくいことが見通された。この点については、今後、さらなる検証が必要である（以上、雑誌論文:矢島 2022／学会発表:矢島 2022）。

（2）言語の複層性に関する検討

言語は規範性の高低を軸とすることによって、地域性を初めとする位相差の発現しにくい層から、そういった位相差が現れやすい層まで複数の層を設定することができる。それを踏まえることによって、日本語の各層で起きた変化を取り上げ、実態を詳細に記述した。なお、以下に記す①は近代日本語の特に標準語の成り立ちに関わる歴史を明らかにしようとしたものであり、条件表現史研究への直接的な貢献のみならず、日本語史・文法史を把握する上で必要な知見を得ようとしたものである。

①．規範意識「高」の言語層に注目した研究

明治中期以降の小説の文体（言文一致体や雅俗折衷体）に見られる言語的諸相（偶然確定条件・話法・ノダ類・語彙など）を＜語り＞と関連付けて観察し、音読から黙読へと読書習慣が変化する中、それぞれの書き手の表現意図と文体とのかかわりを論じた。こうした個人的営為が如何にして社会的営為となるかについて、言語の間主観性に着目をすることにより理論的整備も行っている。また、現代日本語における表現法の揺れにリアルタイムで立ち会う立場からそれを記述・分析する研究を行った。具体的には否定疑問文の応答表現、オノマトペの用法、格助詞ガのゆれについてである。この観点からの研究は、主に研究分担者が担当した（以上、雑誌論文：揚妻 2019abc・2020・2021／学会発表：揚妻 2018ab／図書：揚妻 2018・2019・2022）。

②．規範意識「低」の言語層に注目した研究
　言語変化に直接関わる、新規用法の発生・拡張が最初に認められるのが、多くの場合、規範意識が「低」の言語層においてである。特にそれぞれの地域性が顕著に表れるのは、対人コミュニケーションの方略に直接関わる部位である。条件形を構成要素とする表現で言うと、発話頭の［接続詞］的用法、末尾の［終助詞］的用法がそれに該当する。そのあたりのことを、近世以降現代にいたる日本語史を対象として、各資料の成り立ちにおける規範意識の発動の強弱に留意しつつ、それぞれの条件形の使用状況について観察した。
　その結果、上方・大阪語の特徴は、［接続詞］についていえば、「指示詞＋指定辞＋接続辞」（ソヤサカイ、ホナ、ソレジャガ…）の形式、または「接続辞」のみの形式（ケド…）をとり、先行文との関係を指示詞で指示するか、または指示詞の力を借りず、文同士を、あたかも「接続助詞」であるかのような方法で直接につなぐ方法を好む傾向が観察された。対する江戸・東京語はもともと構成要素としてあった指示詞を脱落させた「指定辞＋接続辞」（ダカラ・ダガ・ダケド・デハ…）を好み、先行部は既定的に捉え、認定済みとして措いておき、改めて自身の発話を開始する方法として用いる様子がうかがえた。上方・大阪語が談話の流れを断ち切らずに、「発話の場は聞き手とともにある」ことを意識した発話を構成する傾向が強いのに対し、江戸・東京語は「自分の認識・意向を分からせよう」とする話し方を選好することがわかる（雑誌論文：矢島 2019／図書：矢島 2018・2019・2020）。
　逆接確定のケレドとガは、ケレドが規範意識「低」で、ガが相対的に「高」でそれぞれ特徴的に用いられる。その相違が、ケレドは「受け手の受容への関連付けを言語化する方向」（～ノダケド）で頻用する傾向を生じ、ガは「丁寧さやフォーマルさを求める方向」（～マスガ、～デスガ）で多用されるという運用差となって現れる。ここには各形式が有する文法的な相違が、各文体として有するテキストらしさを形作る側面となって現れているとも言い換えることができる（雑誌論文：矢島 2018・2020）。

（3）順接・逆接の関係性を視野に入れた条件表現史に関する分析
①．総合的把握を志した研究
　総合的な把握は、最初に言語層のうち規範意識が高低に触れ過ぎない範囲で起きた中央語の言語事象を主な対象として行い、さらに規範意識の高低の言語層で起きている事象を突き合せて整合性のある把握を行う手順とした。条件表現史研究を総合的に把握するにあたり、まずは日本語文法史の変化のうち、条件節末を構成する際に大きな影響を及ぼす事象を明らかにし、それらと条件表現の変化との関わりについて考察した。例えば、活用語尾が機能を変化させ、連体形による準体句がその構成力を弱めること、テンス・アスペクトにおいては、中世末期、タリの末裔タが、本来有していたパーフェクト的意味から過去における完成的意味の側面を強め、一方でテヰタリ（テイル）が継続相として発達しタ・ル形（基本形）が完成相としての役割を明確化させることなど。中世から近世にかけて起きたこれらの変化が、従属節末を構成する述語部分の特性にも大きな影響・変化をもたらす。それによって、「未然形＋バ・已然形＋バ／終止形＋トモ・已然形＋ドモ」を基本形とした条件表現体系が揺さぶられ、各接続辞による従属節構成方法へと移行する。さらに条件表現に直接影響をもたらすのが、「条件節が、主節に対するところの従属節という相対的な立ち位置を鮮明にする」「思考内で捉える因果関係への表現指向が強化する」などの趨勢である。この傾向と、上記文法史上の変化との重なったところで、条件表現の、特に中世から近世に起きた変化は説明される。顕著なところでは、(a)日本語におけるテンス的把握の前景化（タラの用法拡大、トテの参入）、(b) 活用語尾の述語的意味の衰退（ナラの用法拡大、テ系（テハ・テモ）、タッテ類の参入、連体終止形+の接続辞（ノデ・カラ・ガ・ケレド・場合・結果…）の増加）(c) 一般化した把握（恒常条件）の増加などである。規範意識が低い言語層で起きる事象は、これらの推移を基盤としつつも自立した、切り離された動きを示す傾向が強く、対する規範意識が高い言語層では、(a) ～ (c) の変化を前提とし、その条件下でさらなる細分化傾向を示す様子がうかがえる。このあたりの把握については見通しを得た段階にあり、今後の十分な検証を待つ必要がある。（以上、雑誌論文：矢島 2018／学会発表：矢島 2020／図書：矢島 2018・2020。他、矢島正浩（印刷中）「上方語の文法」久保田篤編『シリーズ日本語史第 5 巻　江戸時代の日本語』朝倉書店）。

②．順接・逆接条件の関係性に注目した研究
　①で指摘する特徴の多くは、順接・逆接の両条件表現で共通して観察されることである。順接仮定ではタラ・ナラが発達し、逆接仮定ではタッテ・ジャ（ダ）ッテが発達することなどは、仮定条件が特定時に生起する事柄についての仮定なのか、事実として起きることについての仮定なのかを区別したいという点で同様の発達動機がうかがえる。また、中世期を境とした大きな変化は、順接・逆接共に恒常条件を軸として起きている。そういった共有領域の記述分析は、従属節史の把握において第 1 義的に行われるべきであり、まずはそこに注力して研究を行った。
　その上で、注目すべき相違点もある。1 例を挙げる。上記のとおり、同じく時制辞・断定辞を組み入れた形式が順接逆接に発達するのではあるが、順接では完了タリ・断定ナリという古来の形式を用いるのに対して、逆接では過去タ・断定ジャ（ダ）という新興の形式を用いる。他、いわゆる恒常条件を順接では已然形＋バがそのまま担い、仮定条件へと用法を拡大していくのであるが、逆接では当初は旧来のドモが表していたものが、後世、同形式は参与できなくなり、テ

モ等、別形式が担うに至る。こういった相違がなぜ生じるのかということについて、順接は表現に関与する語がバ中心だったのに対して、逆接はト＋モという複数の語形が関与することが用法の細分化にが関わっている可能性があることなどを明らかにした。（以上、雑誌論文：矢島 2021／図書：矢島 2021・2022。他、矢島正浩（印刷中）「近世前期における逆接仮定条件史―トモとトテ・テモ共存の意味―」岡部嘉幸・橋本行洋・小木曽智信編『コーパスによる日本語史研究―近世編―』ひつじ書房）

以 上

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 矢島正浩	４．巻 80
２．論文標題 『上方はなし』に描かれる文法―原因理由辞を指標として―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 国語国文学報	６．最初と最後の頁 25-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 揚妻祐樹	４．巻 105
２．論文標題 尾崎紅葉『金色夜叉』における不可能表現の特徴―漢文訓読系の語法と和文系の語法―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 藤女子大学国文学雑誌	６．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 揚妻祐樹	４．巻 104
２．論文標題 オノマトペ試論―慣習と創造の狭間で―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 藤女子大学国文学雑誌	６．最初と最後の頁 23-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 矢島正浩	４．巻 79
２．論文標題 条件表現史における「恒常性」再考	５．発行年 2021年
３．雑誌名 国語国文学報	６．最初と最後の頁 21-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 揚妻祐樹	4．巻 103
2．論文標題 現代日本語における助詞ガの「誤用」―「総記の拡大用法」と「とりあえずの格表示」―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 藤女子大学国文学雑誌	6．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 矢島正浩	4．巻 78
2．論文標題 近現代共通語における逆接確定節―運用法の変化を促すもの―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 国語国文学報	6．最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 揚妻祐樹	4．巻 101
2．論文標題 文章論序説（二）―文化としての言語（コセリウに寄せて）―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 藤女子大学国文学雑誌	6．最初と最後の頁 17-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 揚妻祐樹	4．巻 102
2．論文標題 否定型応答要求表現に対する応答の揺れについて	5．発行年 2019年
3．雑誌名 藤女子大学国文学雑誌	6．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 矢島正浩	4．巻 77
2．論文標題 近現代話し言葉資料における原因理由系の接続詞的用法について	5．発行年 2019年
3．雑誌名 国語国文学報	6．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 矢島正浩	4．巻 37-13
2．論文標題 条件表現史から見た近世―時代区分と東西差から浮かび上がるもの―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本語学	6．最初と最後の頁 32-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 揚妻祐樹	4．巻 31
2．論文標題 尾崎紅葉『金色夜叉』の＜語り＞―演劇的な＜語り＞―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本文学会誌	6．最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 揚妻祐樹	4．巻 99・100
2．論文標題 文章論序説（一）―言語表現における「成り下がり」について―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 藤女子大学国文学雑誌	6．最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 矢島正浩
2．発表標題 『上方はなし』に見る「速記本としての落語」」らしさ
3．学会等名 第2回「テキストの中の文法」研究会
4．発表年 2022年

1．発表者名 矢島正浩
2．発表標題 中央語における逆接仮定条件史
3．学会等名 推論過程の言語化における地域語のダイナミクスに関する研究・研究会（招待講演）
4．発表年 2020年

1．発表者名 揚妻祐樹
2．発表標題 ＜音読／黙読＞の言語的痕跡―日本近代小説の文章論のために―
3．学会等名 第70回日本文芸研究会大会（招待講演）
4．発表年 2018年

1．発表者名 揚妻祐樹
2．発表標題 尾崎紅葉『金色夜叉』の＜語り＞と語法
3．学会等名 藤女子大学文学部日本語・日本文学会
4．発表年 2018年

〔図書〕　計9件

1．著者名 中部日本・日本語学研究会・小田勝、千葉軒士、宮内佐夜香、矢島正浩、山本真吾編、藤田保幸、揚妻祐樹ほか19名	4．発行年 2022年
2．出版社 和泉書院	5．総ページ数 532(1-5/97-116)
3．書名 研究叢書542　中部日本・日本語学研究論集	

1．著者名 中部日本・日本語学研究会・小田勝、千葉軒士、宮内佐夜香、矢島正浩、山本真吾編、藤田保幸、揚妻祐樹ほか19名	4．発行年 2022年
2．出版社 和泉書院	5．総ページ数 532(253-271)
3．書名 研究叢書542　中部日本・日本語学研究論集	

1．著者名 田中牧郎、橋本行洋、小木曽智信編、矢島正浩、宮内佐夜香、小島聡子、近藤明日子、髙橋雄太、間淵洋子、横山詔一、竹村明日香、岡島昭浩、新野直哉、服部紀子	4．発行年 2021年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 388（51-73）
3．書名 コーパスによる日本語史研究　近代編	

1．著者名 小野正弘・平林香織・矢島正浩・中里理子・園田博文・鶴橋俊宏・広瀬満希子他7名	4．発行年 2020年
2．出版社 朝倉書店	5．総ページ数 212（13-27）
3．書名 近世の語彙	

1．著者名 青木博史、池上尚、岩田美穂、大木一夫、岡﨑友子、岡部嘉幸、小田勝、勝又隆、川瀬卓、川村大、北﨑勇帆、衣畑智秀、久保薗愛、黒木邦彦、小柳智一、近藤要司、坂井美日、澤田淳、山東功、矢島正浩、他	4．発行年 2020年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 164（63-64）
3．書名 日本語文法史キーワード事典	

1．著者名 揚妻祐樹、岡部嘉幸、小野正弘、金澤裕之、川瀬卓、金水敏、坂井美日、清水康行、野村剛史、宮内佐夜香、宮地朝子、村上謙、森勇太、矢島正浩	4．発行年 2019年
2．出版社 笠間書院	5．総ページ数 323（1-13）（291-315）
3．書名 SP盤レコードがひらく近代日本語研究	

1．著者名 揚妻祐樹、岡部嘉幸、小野正弘、金澤裕之、川瀬卓、金水敏、坂井美日、清水康行、野村剛史、宮内佐夜香、宮地朝子、村上謙、森勇太、矢島正浩	4．発行年 2019年
2．出版社 笠間書院	5．総ページ数 323（168-188）
3．書名 SP盤落語レコードがひらく近代日本語研究	

1．著者名 藤田保幸、山崎誠編、辻本桜介、深津周太、矢島正浩、岡﨑友子、三井正孝、馬場俊臣、森山卓郎ほか20名	4．発行年 2018年
2．出版社 和泉書院	5．総ページ数 608（57-74）
3．書名 形式語研究の現在	

１．著者名 藤田保幸、山崎誠編、辻本桜介、深津周太、矢島正浩、岡﨑友子、三井正孝、馬場俊臣、揚妻祐樹ほか20名	４．発行年 2018年
２．出版社 和泉書院	５．総ページ数 608（337-355）
３．書名 形式語研究の現在	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	揚妻　祐樹 (Agetsuma Yuki) (40231857)	藤女子大学・文学部・教授 (30105)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関